

## 出口延佳の神道説と林家

### はじめに

近世初期における神儒一致や排佛の態度は、思想界に廣くみられる傾向であった。神道史上これら一群を儒家神道と呼んでいる。<sup>(1)</sup>この儒家神道は江戸時代後期に國學が抬頭してくるまで大きな展開をみせたが、これは中世の神仏及び神佛儒のいわゆる習合的神道への批判を契機として生まれてきたものである。儒家神道の主役は、いうまでもなく儒學者たちであつたが、神道家たちの中にも自からの神道説に儒教思想を豊かに援用し、儒家神道の中に身をおく者も多かったのである。しかしこのように近世初期の神道界を席捲した儒家神道ではあつたが、吉田神道や伊勢神道などのような教派としての輪郭が明確なものではなかったために、今までの研究では

出口延佳の神道説と林家（矢崎）

矢崎 浩之

個々の神道説の分析が主流で、その相互の關係については充分な考察がなされていなかったのである。<sup>(2)</sup>本稿では、儒家神道の全體像をさぐる一助として、儒家神道の中でも伊勢神道である出口延佳が、伊勢神道再建の上で儒學者である林家の神道にどう関わっていったかという點を中心に論じていきたいと思います。それに先立って、まず簡単にではあるが、出口延佳及び彼の周邊に集まった門人たちの動向について觸れておく事にしよう。<sup>(3)</sup>

### 出口延佳と外宮祠官たちの活動

まず出口延佳についてであるが、延佳の神道史上に於ける功績として著名なのは、豊宮崎文庫の再建と神書・古典の書寫、校勘に要約できよう。この功により延佳は「伊勢神道中

興の祖」という評價を受け、神宮の歴史に後世までその名を留めることになった。延佳は元和元年（一六一五）に伊勢山田に生まれ、通稱を與三次郎といい、初め延良といつた。<sup>(3)</sup>また愚大夫、信濃とも稱し、直菴、講古堂を號とした。元和六年に六歳で外宮權禰宜となり從五位下に敘せられ、以後六十餘年の祠官としての人生を歩み、元祿三年（一六九〇）七十六歳で亡くなった。外宮祠官としての延佳の廣汎な活動を支えたのは、彼自身の伊勢神宮に對する強い崇拜の念があつたことは言うまでもない。だが延佳の下に集つた多くの門人たちの存在も忘れることはできない。延佳はそれら門人たちの中心にあつて、伊勢神道復興への氣運を盛り立てていったといふべきであらう。その象徴的な存在が延佳の再建した豊宮崎文庫であつたのである。

延佳は應仁の亂のために、全く機能していなかつた外宮の文庫を再建すべく、各方面へ働きかけを行なつた。祠官教育の中心施設である文庫の再建は、伊勢神道復興に不可欠であつたからである。そして延佳の働きにより、慶安元年（一六四八）に豊宮崎文庫が創設された。延佳三十三歳の時である。この文庫には多くの祠官たちが、延佳を慕つて集まつてきた。主な人物を挙げれば、山本廣足、釜屋正好、河邊精

長、中西直方、黒瀬益弘等がいる。彼らはここで延佳から祠官としての教育を受け、その後の神宮運営で中心的役割を擔つていった。延佳の薫陶を受け、神宮運営の一端を擔つたといふ意味では、中西信慶も數えることができよう。<sup>(5)</sup>しかし文庫の再建以上に難しい問題があつた。それは當時祠官にとつて不可欠な神書・古典の大半を長い戦亂の中で散佚してしまつたことであつた。『蟄居紀談』の「神藏祕書」には次のようにある。<sup>(6)</sup>

神宮最重の神書十二卷<sup>目録有別</sup>、を簡ひて調御倉の御神體の假櫃に納むると云事文治元年記に見へたり。文明の兵火に正殿回祿せしかは御倉燒失して十二卷も共に亡ける成へし。

また同書の「倭姫命世記」の項にも、「倭姫命世記應仁文明の頃の兵亂にや絶けん神宮に傳らす」とあり、これによつて當時の慘狀を窺うことができよう。延佳はこの難問を解決するために、各地に傳わる神書・古典の収集に努め、また自から精力的にその書寫を行なつたのである。延佳の寫業の一端は、佐古一列氏によつてまとめられている。<sup>(7)</sup>こういった寫業は延佳一人のみならず、延佳の下に集つた人々も努めたところであつた。特に中西信慶（寛永八、一六三一—元祿十二、一六

九九)と黒瀬益弘(寛永十八・一六四一〜享保十七、一七三二)の寫業は、その書目の多彩さと數量の面で群を抜いている。そして彼らの寫業に延佳の意向が強く働いていたことは想像に難くない。管見の及ぶ限りでは、信慶と益弘の寫業の成果は以下のごとくである。<sup>(8)</sup>

中西信慶寫業一覽

書 寫 年 次	書 寫 文 獻 名
正保四(一六四七)	中臣祓鈔(卜部兼之著)。
承應二(一六五三)	諸國宮神名帳。
同 三	伊勢一社之事。
同 四	大日本國開闢本縁神祇祕文。
寛文二(一六六二)	神境廣博記。
同 三	唯一神道大要、注連之大事、拍手之大事、三種太祓之大事、唯一神道三部印明之大事、唯一神道加持之大事、唯一神道加事之大事(神宮文庫藏『神祇大要』は、以上七書をまとめたものである)。
同 五	内宮寛正三年神寶送官符。常有輯録

出口延佳の神道説と林家(矢崎)

同 七	(中西正幸論文参照、注 <sup>(8)</sup> )。 大神宮造制或問。神宮年代記。大宮司聞書。神宮方書。
同 九	御鎮座本記。御鎮座次第記。御鎮座傳記。大元神一祕書。鼻歸書。神易合勘。三部神道(林羅山著)。寶基本記。宗源神道中臣祓傳。
同 十	文永三年内宮遷宮沙汰文。
延寶三(一六七五)	續別祕文。太田命傳記。神道祕傳折中俗解。
同 四	宇治土公家引付。
同 六	大神宮御相傳袈裟記。當明寺縁起。神鳳鈔。
同 八	慶長九年山口祭記。外宮儀式帳。大宮司精表引付。大宮司舊記。
天和二(一六八二)	光明寺舊記。
貞享二(一六八五)	

以上のほかに、書寫年次不明のものに、『三所太神宮並別宮造替記』と『内外遷宮記』がある。  
次に黒瀬益弘の寫業をまとめてみる。

黒瀬益弘寫業一覽

書 寫 年 次	書 寫 文 獻 名
明曆四 (一六五八)	豐葦原神風和記。
萬治四 (一六六一)	御鎮座次第記。
寬文六 (一六六六)	宗源神道中臣祓傳。
同 八	神宮雜例集 (卷一)。
延寶四 (一六七〇)	神宮方書。神道祓傳折中俗解。
天和二 (一六八二)	大元神一祓書。
同 三	神鳳鈔。

以上のほかに、書寫年次不明のものとして、『類聚神祇本源』と『大神宮諸雜事記』がある。

彼らの寫業に特徴的なことは、書寫の對象を伊勢神道書に限定せず、兩部神道や吉田神道そして林家の理當心地神道にまで視野を広げていた點であらう。

外宮の豐宮崎文庫に續いて、元祿三年 (一六九〇) には内宮にも林崎文庫が再建された。しかし教學の面で、内宮が外宮に遠く及ばなかったのは、このような文庫再建當初の延佳らにみられる教學の復興に對する眞摯な態度が缺けていたからではないだろうか。

林家の豐宮崎文庫記執筆と獻本

このように遅々とした歩みだが、その教學再興に著實な成果をあげていた外宮祠堂にとつて、當時幕府内で學藝・宗教面での發言力を増しつつあった林家は無視できない存在であった。

外宮と林家の關係は、先ず再建間もない豐宮崎文庫の文庫記執筆を外宮側が林家に依頼するという形で始まった。承應元年 (一六五二) 林羅山・鷲峰父子が各々「豐宮崎文庫記」を執筆した。延佳と共に文庫再建に盡力した與村弘正は『參洛記』に次のように記している。

其後羅浮山林氏父子三人、共書文庫記、此記、神宮使介、在洛之砌、獻于油小路宰相殿、盖以爲職事也、宰相殿以此記、被呈干伏原殿、

また『神宮典略』の「宮崎文庫記」には次のようにある。

又御侍讀清原賢忠卿、以三宮崎文庫記<sup>林道春父子作</sup>、内々被入<sup>二</sup>觀覽、因<sup>レ</sup>玆大庫營建之意旨達<sup>二</sup>敕聞<sup>一</sup>、

このように林父子の文庫記は、結果的に延佳らの神宮復興の企圖を後光明天皇へ伝えることにもなったのである。その後明曆三年 (一六五七) に羅山が亡くなると、林家側の窓口

は鷲峰になり、外宮との關係は鷲峰と延佳を中心にして繼續されていった。<sup>(13)</sup> 前掲の『神宮典略』には『神境紀談』の文として次のように記している。<sup>(14)</sup>

萬治二年七月の條に、延良以下、參弘文院、學士被<sup>レ</sup>

對<sup>二</sup>談神書儀、<sup>學士は林道春をいふ。</sup>學士文庫創建實盛舉也、

萬治二年（一六五九）には羅山は既に亡く、また「弘文學士」という稱號からみて、割注の「道春」は鷲峰のことであろう。つまり詳細は不明だが、萬治二年に兩者は直接交渉をもったのである。

そして寛文年間に入ると盛んに獻本が行なわれ、同元年（一六六二）に『羅山文集』と『古文孝經諺解』が、翌二年には『羅山詩集』が豊宮崎文庫に納められた。<sup>(15)</sup> もっとも『古文孝經諺解』の跋文には、「吾が先考羅山叟曾つて春秋四傳一部を納む。」とみえ、こういう獻本は羅山時代からの慣例であつたようである。尙この羅山の獻本こそ文庫再建後最初の獻本だったという記録もある。『伊勢參宮名所圖繪』巻四に「古今奉納の書籍目錄悉く擔下に掲ぐ。凡四千部に及べり。○<sup>(16)</sup>落成のとき林道春の春秋傳一部寄せられしを始とす。按るにこの<sup>(16)</sup>じふんには書籍稀にして漸く神宮の古書を收めしのみなりしを。」とある。以上のような文庫記の執筆や獻本はいわば林家本來の公務に近いことであり、直接林家と延佳の思想的交渉を裏づけるこ

出口延佳の神道說と林家（矢崎）

とにはならない。しかしこのような關係から、儒學の宗家たる林家と復興に向つた伊勢神宮との結びつきが緊密になつていったのは事實であり、やはり近世神道史上看過できないことである。

### 理當心地神道への注目

延佳と林家との關係は文庫記の執筆や獻本等に止まるものではなかつた。これを契機として、延佳の關心が林家の神道である理當心地神道そのものへ向つていったことは確かなようである。

理當心地神道は羅山がその晩年に創唱し、林家に維持されていった。しかし理當心地神道を主題とした書はすべて羅山のもので、後の鷲峰、鳳岡にしても神道書といひうるものはなく、それゆえ理當心地神道は羅山個人の知的興味の産物にすぎず、その他への活動も全くなかつた、と評價されてきた。そのため理當心地神道への注目はあくまで儒家神道の幕あけとしてのものであつた。

しかし羅山自身の自負は大變なもので、『神道傳授鈔』の「十六、神道之興義」で、自己の神道を誇らし氣に次のようにいっている。<sup>(17)</sup>

此神道ハ則王道ナリ。(中略)是ハ天照大神ヨリ相傳マシ  
テ、神武天皇以來代々ノ帝王御一人シロシメス事ナ  
リ。御幼少ノ時ニハ、左右ノ大臣攝政關白ナトノ傳授シ  
奉ルコト也。近代ハ此道シレル人タシカナラス云云

そして中世以來の他の神道を「卜祝隨役神道」と呼び、單なる「神事ノ役者」にすぎないとする。彼の主張は理當心地神道こそ天皇家に代々傳えられた唯一正統な神道であるというものであつた。しかし彼の神道説が吉田、一條、清原家といつた、中世神道諸家の思想や伊勢神宮をはじめとする各社の縁起研究から成り立っていることは明らかである。むしろ彼の神道説の特色は中世諸神道の集大成にあつたといふべきであらう。それは彼の神道方面の主著たる『神道傳授鈔』、『本朝神社考』、『神道祕傳折中俗解』を分析すれば自明のことである。<sup>(18)</sup>

この林家の神道が當時伊勢神道の再建に燃えていた延佳の關心を引いたことは當然といえよう。彼が主著の中で羅山やその著作を直接引用することは極めて少ないが、その少ない引用文の内容を検討してみると彼が羅山のいづれの神道書に接していたかを判斷できる。その代表的な例として延佳の『日本書紀神代講述鈔』があげられる。同書卷四に次のよう

な一文がある。<sup>(19)</sup>

天津神籬、(中略)殊に吉田の兼俱が二子、ひとりはず平野の家をつぎ、其後兄弟不和にして、爭論に及び、吉田に祕事する神籬磐境の偽をいひあらはしたる詞羅山子の書るものに見えたり。ながながしき事なれば略す。

ここでは神代卷の天津神籬の解釋に關連した形で、吉田、平野兩家の論争について觸れているが、この「羅山子の書るもの」というところから羅山の書いたものを彼が見ていたことがわかる。そして、この「羅山子の書るもの」が羅山のいかなる著作を指すのかであるが、これは内容からみて羅山の『神道傳授鈔』の「三十六、神籬ノ事」が該當しよう。<sup>(20)</sup>

吉田神主兼滿・平野神主兼與ハ從兄弟ニテ諍論アリ。吉田申ケルハ、大織冠ノ狀云、天津神籬璽、一名天津磐境神籬ノ正印ハ、大織冠ヨリ意美丸ヘ授ラレ、代々相承シル我家ニアリ。他人ノトコロニアラス。唯授一人ノ寶物ナレハ、此正印ヲ以テ邪神ノホコラヲ破却スレトモタ、リヲナスコトナシ。然ヲ、二條町ノ鍛冶ヲシテ新敷銅ヲ以テコレヲ作ルト平野申ス條甚イハレナシ。父祖ヲカスメ我家ヲサミス。先祖ニ對シテ不孝ナリ。神靈ニ對シテ罪人ナリ云。近年、惺齋聞テ申サレケルハ、平野其時

何故ニ答申ササルヤ。ヒモロにノコト日本紀ニアリトイヘトモ、上古ノコトナレハ、其名アリ。其形ヲシラス。但、其形イカヤウナル物ソヤ。社ノスカタニテモサカキキノ形ニテモ、大概如此アランカト了簡シテ、後代ノ子孫ニ示ンタメニ、鑄物師ヲヤトヒカタラヒテ試ニ少クリテ見タルマテナリ。神代ノヒモロキ織冠ノ筆迹モ、久キコトナレハ今ニ傳リテアルヘカラス。吉田ナキコトヲ少クリ、實ニアリト申スハ、神明ニモ先祖ニモ虚言ヲ申シカクル也ト云。

これは文中に「惺齋」とあるように、儒學の師藤原惺窩から羅山に傳えられたことがもたらした記述である。この『神道傳授鈔』は羅山の他の『本朝神社考』や『神道祕傳折中俗解』と異なり、時の大老酒井忠勝の命によつて獻上されたものであった。また林家代々に切紙相承されていたものでもあり、江戸時代を通して祕中の祕として藏されてなかなか他見の許されるものではなかった。延佳が本書を見ていた形跡があるということは、それだけ林家の神道に精通していたことになる。さらに前述したように、延佳のもとに中西信慶がおり、その寫業中に林家の神道書が含まれていて、自からも『神境紀談』に『本朝神社考』を、『日本書紀神代卷風俗鈔』

出口延佳の神道説と林家（矢崎）

に『神道祕傳折中俗解』（二箇所<sup>(22)</sup>）を引用していることも注目に値しよう。尙延佳の『日本書紀神代講述鈔』の成立は寛文十二年（一六七二）、信慶が行なつた羅山の『神易合勘』と『神道祕傳折中俗解』の書寫は寛文九年と延寶四年（一六七八）である。

以上のことから、延佳及びその周邊に林家の神道、理當心地神道研究の動きがあつたことは確かであり、文庫記執筆や獻本からはじまつた林家への關心はその神道説そのものへと展開していったと考えられるのである。

### 延佳の關心の所在

では延佳が最も林家の神道の中で關心をもつたのは何だったのであろうか。そして何を受容したのであろうか。ここでは次の二點に注目してみたい。一つは神道と易の問題であり、もう一つは「今日の神代」に代表される獨特新神代觀をめぐる問題である。

先ず神道と易の問題を考えてみよう。延佳はその主著の中に常にこの問題に觸れてきた。慶安三年（一六五〇）<sup>(23)</sup>三十七歳の時に著した『陽復記』の中で次のようにいっている。

我國のむかしより語り傳たる事の、をのづから易にかな

ふ故に、神書を撰べる人の易と附會したることばあり。日本の神聖の跡、唐の聖人の書に符を合せたる事はいかゞと思ふべけれど、天地自然の道のかの國この國ちがひなき、是ぞ神道なるべき。其後又三代は二神づつ化生し給ふとなり。是を坤卦の耦文の三畫に表ざるならんと云。此理は上にしるしぬ。國常立尊より第七代めにあたりて伊弉諾尊・伊弉册尊二神出生し給。是を伊弉諾尊は乾卦三畫成就、伊弉册尊は坤卦三畫成就にて男女の體も定りぬるならんと云。をのづからかなふところ深意あるもの也。

また萬治三年（一六六〇）四十六歳で著した『神宮祕傳問答』ではこのようにいう。<sup>(24)</sup>

異國ノ易モ人爲ニ出タル物ニアラズ。天文ヲ觀（イ・ジ）、地理ヲ察シテ始シ物也。本朝ノ神聖モ、天文地理ヲ觀察シテ自然ノ理ニ從テ神道ヲモ教ヘ給フナリ。今トテモト合ハ自然ニ從フ也。天文地理、異國而已ニアリテ日本國ニアルマジキヤ。（中略）況ヤ日本ノ神聖、異國ノ聖人ニヲトリ給ベキヤ。但シ漢字ニアラハシタル書ノ上ニテ見レバ、異朝ヨリ日本ハヲトルタル様ナレドモ、其レハ漢書ノ書ヲ日本ニテ學テモ吾國ノ書ナラネバ。異國ノ如キ文

人ナク、記シトゞメヌ故也。

そして本書の續篇である天和二年（一六八二）六十八歳の『神宮續祕傳問答』でも次のように述べている。<sup>(25)</sup>

神道モ易道モ自然ニ從フ故ニ道理相カナフ事アリ。殊ニ日本紀神代卷ナドニモ易ヲ借テ漢字ニアラハシタル所アリ。シカリトテ易ヨリ出タル神道ニハアラズ。（中略）神道ハ日本ノ道也。儒道ハ震旦ノ道也。佛道ハ天竺ノ道也。吾身ハ異國人カ、本朝人カト身ヲ省ヨ。如レ此了簡ノ上ニテ本朝ヲ主トシテ異國ノ聖賢ノ書ヲ學ベ、吾神道ノヨキ羽翼ナルベシ。

また延佳はその書簡中にも、神易一體論をといっている（神道大系『伊勢神道』下を参照）。

勿論中世神道においても、その教理化で易の占める比重は決して輕くない。北畠親房の著作や伊勢・吉田の神道書をみれば、易の理論は隨所に展開されている。しかしそれはあくまで多くの儒書、漢籍の中の一書としての援用に止まるのであつて、特別に易に意を用いたものではないのである。延佳の場合、ところどころに祠堂としての一面、つまり神道の羽翼として儒教をみる態度を、のぞかせてはいるが、これらの文章では易そのものの神代解釋における價值を積極的に認



め、神代理解での易の必要性を説いているのである。このようなことこそ延佳が、儒學の宗家たる林家、そしてその神道説たる理當心地神道に強い關心をもった最大の理由だったのではないだろうか。

林家においてもこの神道と易の問題は自家神道説上の重要なテーマであつた。そのことは、羅山が著した『神易合勘』（以下『合勘』と略す）と、鷲峰が延佳自身に神易一致の考えを示した「勢州度會延良に示す」（以下「延良に示す」と略す）の一文の存在がよく物語っている。まず『合勘』であるが、本書は三〇〇字餘りからなる短文で、『日本書紀』神代卷が易の理論に合致することをのべ、神道と易道的一致を導き出しているのである。ここに全文を記す<sup>(26)</sup>

余嘗讀<sup>ニ</sup>日本紀神代卷、聊覺<sup>レ</sup>合<sup>ニ</sup>易道。今講<sup>ニ</sup>先天後天兩段、粗演<sup>ニ</sup>其旨。曰。天神七代之序、先輩既以太極兩儀五行配<sup>レ</sup>之、則今不<sup>レ</sup>贅<sup>レ</sup>之。諸尊・冊尊・陰陽對待者、先天之乾坤也。生<sup>ニ</sup>日神月神者、離東坎西也。生<sup>ニ</sup>山、生<sup>ニ</sup>海、生<sup>ニ</sup>風雷之神者、震巽艮兌也。且、天照太神以<sup>ニ</sup>陰體稱<sup>ニ</sup>日神者、猶離<sup>ニ</sup>陰卦而有<sup>ニ</sup>日像<sup>ニ</sup>乎。月讀尊之爲<sup>ニ</sup>男體者、猶坎<sup>ニ</sup>陽卦而有<sup>ニ</sup>月象<sup>ニ</sup>乎。所謂、諸尊神功既畢、寂然長隱、功至德大者、後天乾老而退<sup>ニ</sup>於不用之位<sup>ニ</sup>者乎。

出口延佳の神道説と林家（矢崎）

日神代<sup>ニ</sup>諸尊臨<sup>ニ</sup>天上者、離得<sup>ニ</sup>乾位<sup>ニ</sup>南面嚮<sup>ニ</sup>明而治者乎。日神與<sup>ニ</sup>素戔<sup>ニ</sup>相誓生<sup>ニ</sup>男女神者、所謂乾坤相索而生<sup>ニ</sup>六子<sup>ニ</sup>之義乎。授<sup>ニ</sup>皇孫<sup>ニ</sup>以降<sup>ニ</sup>於地下<sup>ニ</sup>者、震在<sup>ニ</sup>東方<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>器之謂乎。頗雖<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>牽合附會<sup>ニ</sup>、彼此相發明則易道神道之爲<sup>ニ</sup>一理<sup>ニ</sup>者、可<sup>ニ</sup>推知<sup>ニ</sup>焉。神代卷往々用<sup>ニ</sup>易文字<sup>ニ</sup>、則舍人親王亦非<sup>ニ</sup>無意<sup>ニ</sup>於此<sup>ニ</sup>也。邵子以<sup>ニ</sup>堯舜<sup>ニ</sup>後分<sup>ニ</sup>先天後天<sup>ニ</sup>論<sup>ニ</sup>之。今倣<sup>ニ</sup>其意<sup>ニ</sup>、以<sup>ニ</sup>諸尊擬<sup>ニ</sup>先天<sup>ニ</sup>、以<sup>ニ</sup>天照太神擬<sup>ニ</sup>後天<sup>ニ</sup>。未<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>的當否<sup>ニ</sup>。姑記<sup>ニ</sup>以示<sup>ニ</sup>子孫<sup>ニ</sup>。

一方鷲峰の著した「延良に示す」の一文は、『鷲峰林學士全集』に收められている。<sup>(27)</sup>ここでは『易』の方に注目し、そこから『合勘』同様の神易一致の結論を出しているのである。易曰神也者妙<sup>ニ</sup>萬物<sup>ニ</sup>。神者何乾坤也。妙者何陰陽造化之跡也。乾稱<sup>ニ</sup>乎父<sup>ニ</sup>坤稱<sup>ニ</sup>乎母。震巽離兌坎艮者乾坤六子。而雷風水火山澤各爲<sup>ニ</sup>之象<sup>ニ</sup>。六子皆於<sup>ニ</sup>造化<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>功用<sup>ニ</sup>。悉無<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>統<sup>ニ</sup>於乾坤生成之德<sup>ニ</sup>。然則乾坤者本也。六子者分<sup>ニ</sup>職<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>其用<sup>ニ</sup>也。此所以爲<sup>ニ</sup>其妙<sup>ニ</sup>萬物<sup>ニ</sup>也。推而<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>之則。本朝八百萬神皆無<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>威驗<sup>ニ</sup>。要<sup>ニ</sup>其本源<sup>ニ</sup>、則非<sup>ニ</sup>陽神陰神分身之靈蹤<sup>ニ</sup>乎。嗚呼妙哉。所謂陰陽不測之謂<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>。神道則易道也。是道陰陽<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>人有<sup>ニ</sup>仁義配<sup>ニ</sup>天之陰陽<sup>ニ</sup>。然則天人一理。神道亦豈遠<sup>ニ</sup>乎哉。

讀<sub>レ</sub>易則斯神至矣<sub>ル</sub>。

戊午<sub>（筆者注 寛文九年）</sub>十一月十七日

この一文がいかなる經緯をへて、鷲峰から延佳に示されたのか詳細は不明だが、まず延佳の要請を受けて、それに鷲峰が答えたものと考えるのが自然であろう。延佳の林家神道受容の意欲の一端を窺わせるものである。

「延良に示す」の一文は、いうまでもなく延佳の知るところであるが、前掲の『合勘』も鷲峰が延佳へ一文を示した同年、つまり寛文九年に延佳の門下、信慶によって書寫され（前掲の信慶の寫業一覽を参照）、後の延寶六年（一六七八）には林家から延佳へ直接渡っている。<sup>(28)</sup>つまりこの『合勘』も結局延佳が熟知するところとなったのである。以上において特に注目されるのは、延佳が「延良に示す」を得た頃から『合勘』との接觸も始まったということである。前述のように、『合勘』は『日本書紀』神代卷から、「延良に示す」の一文は『易經』から、各々神易一體論を説いたものである。つまり延佳は、神代卷からと易經からとの両面からの神易一體論を林家から得て、それを自己の神道論にもちこもうとしたのである。このように見ると延佳の理當心地神道への關心の中心に、神易一體論があったことが確認できよう。そこで次

に、この神易一體論とも關連する「今日の神代」について考えてみたい。これはいかに神、神代を今、自己に於いて知るか、という彼獨特の神代觀である。先學の中にもこの點に言及する者少なくないが、いずれも極く簡単に觸れるのみである。本稿では更なる考察を試みてみたいと思う。

この延佳の獨特な神代觀が表明されているのは明暦二年（一六五六）の『神代之圖』（以下『圖』と略す）と天和三年（一六八三）の『神代圖鈔』（以下『圖鈔』と略す）の二書のみである。<sup>(29)</sup>

吾聞、善言<sub>レ</sub>古者合<sub>二</sub>之於今<sub>一</sub>、能述<sub>レ</sub>遠者考<sub>二</sub>之近<sub>一</sub>。夫昔必不<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>今。今尙不<sub>二</sub>以爲<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>古。則神代在<sub>レ</sub>今、今亦在<sub>二</sub>神代<sub>一</sub>者歟。

この『圖』の言葉を改めて和文にて解説したのが『圖鈔』の次の文である。<sup>(30)</sup>

近く今日の上にて云時は、人心寂然不動之地也。此寂然不動より漸々天神七代地神五代とも分れたり。是も心中にあてゝ工夫し給ひなは、今日の神代と申事御合點あるへし。萬事萬物の上も如此候。

尙『圖』には該當文はないが、この箇所の前段にも「今日の神代」の言葉がみえる。

されとも末代の神道の學者神代よりの事跡のみにかゝりて、今日の神代と云事を知人まれ也。

これらは、自己の心に「寂然不動」の状態をもたらしこと、神代の出来事つまり神々の生成の様を感じ得ることができ、という主旨である。そしてそれは單に「神代よりの事跡」を知ることではなく、日頃の神道崇敬の念からしか得られないことであると強調する。つまり延佳にとつて、「神代在今」や「今日の神代」とは、遠い人知の及ばぬ神代のこと、神々のことを、卑近なる自己の問題として解決したものであったのである。しかし『圖』と『圖鈔』の該當文を読み比べてみると、そこに教理上の深化があつたことに氣づく。それは彼の『圖鈔』になつてはじめて現われた「心中にあてゝ工夫」という言葉に象徵されるような心の修養論の導入である。ここにいう心の工夫とは、心によつて實感的に神を感じ得る工夫というほどの意味であると思われるが、なぜ延佳が『圖』と『圖鈔』の間、二十七年の間にこのような教理上の深化を遂げられたのであろうか。ここでも林家との關係が注意されるのである。そこで『圖』から『圖鈔』までの二十七年間における延佳と林家の關係を今一度簡単に振り返つてみよう。

出口延佳の神道説と林家（矢崎）

一六五六 『圖』成る。

一六五九 鷲峰と延佳の會談。

一六六九 『合勘』の書寫（信慶による）。「延良に示す」の一文成る。

一六七〇 『三部神道』（羅山著）の書寫（延佳による）。

一六七二 『神代講述鈔』成る（『神道傳授鈔』引用）。

一六七五 『俗解』の書寫（信慶による）。

一六七六 『俗解』の書寫（益弘による）。

一六七八 『合勘』林家より延佳へ渡る。

一六八三 『圖鈔』成る。

※『俗解』は『神道祕傳折中俗解』の略。

『圖』成立以前の林家と延佳の接觸が、獻本や文庫記執筆のみであつたのに對して、本書成立以後は大部分が林家の神道書をめぐるものであることがわかる。特に延佳の周邊で『俗解』の書寫が二度行なわれていることが注目される。『俗解』の存在が延佳にまでとどいていたことは想像に難くない。この『俗解』の中でも卷二「開闢初神」の次の記述は、延佳の神代觀構築に林家との關係が深かつたことを示す例證となろう。<sup>(3)</sup>

我朝ノ遠古、舊記詳ナラサレバ、今ヲ以テ古ヲ見、身ヲ

以テ天地ヲ見、氣ヲ以テ陰陽ヲ見、心ヲ以テ神明ヲ知ヘシ。遠ク外ニ求ムベカラズ。天地萬物、元來人ノ身ニ具ルユヘナリ。古人天地ヲ以テ人ノ心ノ譬トスルハ、此ナルベシ。

「遼古」つまり神代のことは明確な記述を缺くので、「今」から「古」を察知していくしかない。このような態度で「神明」のことも我が「心」によってのみ知ることができる。決して「遠」くに求めてはならないというのである。少々抽象的口調ゆえに意味を正確に取り難いが、先の延佳の論調とは軌を一にしているといえよう。また先引の「延良に示す」の一文にも、易を讀むことによって神を實感的に感得できるという類似的の議論があつた。つまり『俗解』や「延良に示す」の一文との出會いによって、延佳は『圖鈔』にみられる教理的深化を可能にできたといえよう。ことによると鷲峰が「延良に示す」の一文を執筆した契機、つまり延佳の質問とは、この問題についての理論づけのためのものだったのかもしれない。勿論『圖鈔』にみえる「今日の神代」を、江見氏のごとく「儒家の意」<sup>32</sup>とし、延佳個人の儒學研鑽の成果と考えることもできよう。延佳ほどの學才をもってすれば、それ不可能ではない。しかし延佳に儒學上の師がいたという傳

承もなく、また當時の外宮周邊に儒書がまとまって存在していたことは考えにくい。それは豊宮崎文庫再建に際してようやく多くの儒書が奉納され、その體をなしたということからも想像できる。そこでやはり延佳の「心の工夫」による神代の感得というこの獨特な神代觀の體得は、理當心地神道、その神易一體論との接觸の中で醸成されていたと思われるのである。

以上の事柄をまとめると、理當心地神道への延佳の關心は、當初文庫記執筆や獻本ということからはじまり、やがて鷲峰を通して徐々に林家の神道說そのものへと發展していった。そしてその中で延佳が自說の展開に於いて林家から攝取した論說の代表的なものが、神易一體論と「今日の神代」だったのである。延佳が伊勢神道の中世的世界から近世的なそれへの脱皮を果していく上で、林家の神道は大いに利用價值を持っていたのである。

## おわりに

最後に延佳の林家接近の企圖を近世初期の伊勢神宮を取り巻く狀況からまとめてみたい。

近世に入り伊勢神宮を最初に襲ったのは、正保四年（一六

四七)の例幣使再興をめぐる問題だった。例幣使とは神嘗祭の時に朝廷から遣される使者のことで、應仁の亂以降長く絶えていたものであった。徳川幕府の安定に伴ない、中世以降絶えていた朝儀、神事は徐々に復活を遂げていった。例幣使を手始めにして、石清水放生會(延寶七年)、大嘗會(貞享四年)、新嘗祭(同五年)、賀茂祭(元祿七年)、七社奉幣(延享元年)などが代表的なものである。正保四年の例幣使再興はまさに一連の復活神事の魁となった。教勢の立て直しを目指す神宮にとって、それは絶好期であった。そこで神宮側はこの例幣使再興に際し延徳元年(一四八九)の吉田兼俱の密奏事件を主な理由に、例幣使の四姓使(王、忌部、中臣、卜部)の中から、卜部氏排斥の運動を展開したのである。この運動の中核を擔ったのが、延佳であった。延佳の主張は『神敵吉田兼俱謀計記』の中で展開されている。子、延經の『辯卜抄』も父と同じ經緯のもとに成立したといえよう。伊勢神道の復興にとって、吉田神道との對決は避けられない事であった。

頼るべき教學の衰頹、その再興に不可欠な古典、神書の散佚、そしてこのような神道界での吉田家の優位、伊勢神道復興をはかる延佳にとって當時は最悪の状況であったといえよう。近世に入り、後發の吉田神道は兼見、梵舜の盡力により

織豊から徳川へとつづく武家政權下でもその存在を確固たるものとし、その後も吉川惟足を介するという形で教學の發展をも可能にしていた。伊勢神宮の祠官としての自負を人一倍もっていた延佳にとって、この吉田神道の軍門に下ることは決して許されないことであった。このような中で伊勢神道の新しい展開を試みるとき、延佳がとるべき道は儒學者の神道である理當心地神道であったのではないだろうか。林家と延佳及びその周邊との交流は、まさに近世初期の神道界の動向の一斑を窺わせるものである。

#### 注

(1) 『神道信仰の系譜』(ベリかん社、昭和五十五年刊)の「用語解説」参照。

(2) ただ一つの例外としては、山崎闇齋と吉川惟足、出口延佳の關係がその直接的交渉のゆえに早くから論じられてきたくらいであろう。主なものに、平重道氏『近世日本思想史研究』(吉川弘文館、昭和四十四年刊)や山本信哉氏『垂加神道の源流と其の教義』(『闇齋先生と日本精神』、至文堂、昭和七年刊)等がある。

(3) 本稿においては諸先學の業績を多く利用させて頂いた。出口延佳の傳記關係は、平出鑑次郎氏「度會延佳及び其神學」

- (4) 『史學雜誌』 十二一五〇九、石谷齋藏氏「出口延佳傳」
- (5) 『國學院雜誌』 十八一四〇十二、江見清風氏「出口延佳神主の事蹟と學說」(『神社協會雜誌』 十一一七〇十二、後に『神道說苑』明治書院、昭和十四年刊に收む)。延佳の神書・古典研究では、青木紀元氏の諸研究によったところもある。
- (6) 後西天皇の諱、良仁を避けて、後に延佳と改める。
- (7) 『日本史總覽』Ⅳ 近世Ⅱ(新人物往來社、昭和五十九年刊)の芳賀登氏作製「神道系圖」では、延佳の門人とする。
- (8) 大神宮叢書『神宮隨筆大成』後篇(臨川書店、昭和五十一年刊)卷上、四二二頁。以下叢書所收の史料は書名のみを記しその他は略す。
- (9) 『度會延佳と豐宮崎文庫』、神道大系『伊勢神道』下月報二十七。正保二年(一六四五)から承應二年(一六五三)までの書寫、校合の一覽がある。
- (10) 『國書總目錄』、『神道書籍解説目錄』第二輯(國學院大學圖書館、昭和三十九年刊)、中西正幸氏「中西信慶とその思想」(『神道思想史研究』、安津素彦博士古稀祝賀會、昭和五十八年刊)などを参照。
- (11) 内外兩宮の文庫の沿革については、惠良宏氏「神宮文庫の沿革」(『古文書研究』二十九)参照。
- (12) 内閣文庫藏、二丁表。内題として「承應三年甲午夏四月參洛日記昇順源弘正識」とある。
- (13) 鷲峰の弟、讀耕齋にも「豐宮崎文庫記」があるので、ここでは「三人」と表記したのかもしれない。詳細不明。
- (14) 『神宮典略』後篇「三十六宮崎文庫」六。五頁。
- (15) 兩者の間で伊勢山田奉行八木但馬守宗直の果たした役割は大きかったようである。『世々のめぐみ』(内閣文庫藏) 十七丁裏には「餘與但牧交際年久、不堪感歎作頌賀之」(寛文三年の林春齋先生祝賀頌)の一文を引いている。
- (16) 注(12)に同じ。
- (17) 『鷲峰先生林學士全集』(内閣文庫藏) 卷九十五参照。以下『鷲峰』と略す。
- (18) 内閣文庫藏、二十七丁表〜二十八丁裏。
- (19) 神道大系『藤原惺窩 林羅山』三四三〜四頁。以下『惺窩羅山』と略す。
- (20) 『神道祕傳折中俗解』については筆者自から考察を試みたことがある。「林羅山『神道祕傳折中俗解』小考」(『神道宗教』一三三號)。
- (21) 神道大系『伊勢神道』下、二八六頁。以下『伊勢』下と略す。
- (22) 『惺窩 羅山』三六一〜二頁。
- (23) 岩橋小彌太氏「理當神道切紙」(『神道史叢書』吉川弘文館昭和四十六年刊)。
- (24) 『日本書紀神代風俗鈔』(神宮文庫藏全九冊) 第二冊九丁

裏十丁表、第七冊二十六丁表～二十七丁表。

- (23) 『度會神道大成』後篇『陽復記』二頁。
- (24) 同右、『神宮祕傳問答』四十六頁。
- (25) 同右、『神宮續祕傳問答』四十六頁。
- (26) 『惺窩 羅山』四二五頁。
- (27) 『鶯峰』卷四十五參照。
- (28) 『伊勢』下、解説の年表を參照。
- (29) 同右、三〇三頁。
- (30) 同右、四三三～四頁。
- (31) 『惺窩 羅山』四三三頁。
- (32) 『今日の神代』(『國學院雜誌』二〇一四、後に『神道說苑』に收む)。

(平成二年一月二十七日稿了)

〔補記〕内宮と林家との關わりについては、神宮文庫藏『神道五家之辨』(寫本)の存在が注目されるが、詳細は後考を期したいと思う。尙、本稿の骨子は、早稻田大學東洋哲學會平成元年度大會での發表をもとにしたものであることをお断りしておく。